

この『一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ』は、その題名からして昨年、大手前大学交流文化研究所が中心となり刊行された『一九二〇年代東アジアの文化交流』を引き継いで、企画されたものである。二〇〇九年一月に行われた同名のシンポジウムが成功裏に終わり、しかし、同時に一九二〇年代の文化交流がいかにも豊かなものであり、さらに追求しなければならない課題も多く見いだされたことから、その続編となるシンポジウムが企画され、二〇一〇年一月に、交流文化研究所の主催で開催された。本書は、そのシンポジウムの報告書という形を取っている。

しかし、ここにおさめられた原稿は、ほぼそのシンポジウムのために寄せられた論文を元にしてはいるが、本書の構成は実際のシンポジウムそのままではない。それは、現実には多くの人々に集まってもらうシンポジウムでは、忙しい時間をぬって来てくださる参加者のやむを得ざる様々な事情によって、企画通りの順番で発表できないということも、起こるからである。

本書の寄稿者で一番近くから来ていただいたのは、大手前大学のある西宮市のすぐ隣にある芦屋市にお住まいの竹村民郎先生である。しかし来ていただいたのは、決してお近くに住むからという理由からではない。竹村先生は、一九二〇年代の阪神文化論、大正文化論については、早くから研究を進められ、またご自身のご専門である経済学の領域についても、この時代について語る事ができるといふ、まことに得がたい先学の学究なのであ

一方、もつとも遠いところから来ていただいたKaren Thorner (カレン・ローラ・ソーンバー)・ハーバード大学准教授は、ハーバードからアメリカ西海岸を経て、はるばるかけつけていただいた。日本にいる時間よりも、飛行機の中にいる時間の方が長いのではないかと、と思えるくらいに強行軍の日程であった。それも、様々なご縁によって実現したことである。Thornerさんの近著『Empire of Texts in Motion: Chinese, Korean, and Taiwanese Transculturalizations of Japanese Literature』<sup>15</sup> 二つの大きな章を受賞したが、その一つは国際比較文学会のアンナ・バラキアン賞であり、本学文化交流文化研究所の川本皓嗣所長は、元国際比較文学会会長であり、同賞の審査委員であった。アンナ・バラキアン賞の授賞式は昨年(二〇一〇年)八月にソウル・中央大学校で開かれた国際比較文学会世界大会において行われた。川本所長は、アジア出身の国際比較文学会名誉会長として、Thorner教授への授賞式のプレゼンターを勤めたのであった。このような「ご縁」によって本シンポジウムへ参加が実現したのである。

以上のお二人は、このシンポジウム全体の基調講演を行うにふさわしい一九二〇年代に関する抜群の業績をあげて来られた方々であり、本書の第一部に置かせていただいた。

第二部の「演劇の西洋・東洋」には、二人の中国の研究者の発表がおさめられている。一人は北京大学の程朝翔教授の一九二〇年代に始まる中国のシェイクスピア受容に関する論文であり、もう一つは北京語言大学の周闊教授の日本人・辻聴花の中国演劇研究に関する論文である。一方は、西洋からの受容、一方は、日本が中国文化を受容と方向性は異なっている。しかし、程教授の論文に現れるとおり、中国のシェイクスピア受容の初期段階には、日本経由の部分があり、決して中国とイギリス、アメリカとの二国間関係だけに止まるものではないことが、明らかにされている。一方、一九二〇年代に盛んになる日中間の往来に伴って中国に在住する日本人も多く

なり、日本人による中国の伝統文化の再発見も行われるようになる。明治に至るまで日本人の中国文化受容は圧倒的に文字媒体によるものであったから、会話、歌唱によって成り立つ中国の伝統演劇はもつとも疎遠な素材であった。その中国伝統演劇に深く迫ったのが辻聴花であり、近代日中交流がどちらかと言えば、日本から中国への影響という形で語られることが多いことに対して、新たな視角を綿密な実証によって提出するものとして評価したい。

第三部の「相互理解の詩学」では、詩を通じた交流の具体相が語られる。一つは、中日、もう一つは日韓に関わる。日本の受容のあり方は、一方は中国人が主体であり、一方は日本人が主体である。受容の方向は、その反対である。

しかし、周作人の場合、単なる日本の詩歌の影響という現象に止まるものではなく、むしろ徳川時代の文化を広く再評価するという深い日本文化理解に立脚した作業であったことが、東京工業大学の劉岸偉教授によって明らかにされている。中国の優れた文学者が豊かな日本文化の知識を持って、日本文化を主体的に評価して見せた点に、周作人の業績の評価があるであろう。

韓国祥明大学の梁東国教授の「萩原朔太郎と韓国」は、大正時代の日本詩人と韓国との関わりの一つの側面に照明を当てたものである。北原白秋に見いだされた金素雲が、日本の文壇で翻訳者として活躍したことから、日本詩人と韓国の関係は様々な形で繰り広げられることになる。三好達治などに比べ、萩原朔太郎と韓国の関わりは、従来知られていない部分が多かったので、梁教授の研究論文はその部分を明らかにしてくれる点で貴重である。

第四部では、それぞれ東アジアの文化交流において大きな役割を果たした文学者達の作品とその交流の有様が描かれる。詩人・金子光晴と中国の文学者の交流の様相を深く追究している趙怡・東京工業大学講師の論文が最

初を飾る。中国文人との交流の深かった谷崎潤一郎の語りに焦点を当てている岩谷幹子氏の論文は、当時の日本を代表する新進作家の創作の秘密の一端を語り得ているであろう。掉尾を飾る巖安生・北京外国語大学教授の郭沫若の詩の分析、読みは、長く日本に留学し、日本人と結婚し、彼の若かりし日の文学活動を代表する「創造社」が日本において結成されるなど、日本との関係を考えずには語り得ない近代中国の大作家の詩人としての一面を豊かに描き出している。

一九二〇年代は、日中関係は小康状態の時代であった。過酷であったと言われる大日本帝国の植民地統治も、第一次大戦後の日本経済の繁栄もあって、比較的穏やかであった時期であった。こうした中で、東アジアの文化交流は一つの隆盛の時代を築き、その中には魯迅、郭沫若、金東仁、廉想渉など、東アジアの二〇年代を飾る中国の代表的な作家の姿があるのである。また日本の文学者も谷崎潤一郎や芥川龍之介など日本を代表する作家が中国を訪れ、中には金子光晴のように中国と深く関わって創作を行っていく詩人も生まれた。郭沫若たちの同人の名称「創造社」が端的に物語るように、二〇年代東アジアは、芸術的創造の時代であった。

二回のシンポジウムでは触れることができなかったが、北川冬彦、安西冬衛が一九二四年、詩誌「亜」を大連で創刊したことは、東アジアという枠組みの中で文学の隆盛を物語る意義深い出来事だった。

このように、一九二〇年代は、文化・文芸の花咲く小春日和の時代と言うことができるが、それは、日本の第一次大戦の「戦勝」によって不問に付され、封じ込められてしまった遼東半島、山東半島の日本の権益問題、朝鮮の独立問題という東アジアの中の悪性腫瘍を内に抱えた短い平和であった。一九二三年の関東大震災は不気味な予兆の地鳴りとなり、一九二九年の世界大恐慌をもって、二〇年代の仮想された平和は終焉へと雪崩れ始めるのである。

しかしそれでもなお、文学という一面にかぎっていえば、現在の東アジアは二〇年代を乗り越える高みに達したということとはできない。東アジア文学の最近の高峰は二〇年代から三〇年代半ばにかけてである、と筆者は考えるものである。二一世紀の東アジアの文化を考え、創出していくためには、二〇年代の東アジアの文化の総括は、もつとも大切な作業なのである。本書がその作業の一助となることを願い世に問う次第である。

大手前大学教授・一九二〇年代東アジア文化交流シンポジウム幹事

上垣外 憲一

第一部 東アジア総観 一九二〇—一九三〇

一九二〇年代の東アジア文化交流と間テクスト性

カレン・ローラ・ソーンバー 3

孫文の日中経済同盟論とその周辺

竹村民郎 29

——瀧川辨三・儀作の実業思想に関連して——

一 はじめに——黎明期マッチ産業と瀧川家—— 29

二 マッチ貿易をめぐる瀧川家と華僑 41

三 孫文の日中経済同盟論と瀧川儀作 50

第二部 演劇の西洋・東洋

一九二〇年代中国におけるシェイクスピア

程 朝翔 63

辻聴花の中国劇研究

周 関 72

第三部 相互理解の詩学

小さな詩——周作人の日本詩歌論について——

劉 岸偉 97

萩原朔太郎と韓国

梁 東国 108

——〈青猫〉の響きと官能表現の変容を中心に——

一 はじめに 108

二 朝鮮人虐殺事件と萩原朔太郎 110

三 〈青猫〉の響き——朔太郎と李章熙—— 112

四 黄錫禹の「碧毛の猫」 122

五 日本近代詩の中の〈青猫〉 128

六 官能表現の変容——朱耀翰と朔太郎—— 133

結びにかえて 140

第四部 花咲く文芸

目次 自伝か、小説か、詩か

——金子光晴・森三千代が描いた一九二〇代の上海——

趙 怡 149

一 はじめに 149

二 金子夫婦の上海体験 150

三 金子夫婦が語る上海生活 158

四 上海の都市風景(その一) 165

五 上海の都市風景(その二) 175

おわりに 180

「もの」と云ふもの

——一九一〇年代後半及び二〇年代前半の谷崎潤一郎の名詞表現をめぐる一考察——

岩谷幹子 189

一 はじめに 189

二 「と云ふもの」 190

三 「抽象名詞」の多用による人物描写 199

四 『痴人の愛』における人物表現 205

五 『痴人の愛』における時間表現 214

おわりに 220

郭沫若の『女神』を再読する

一 はじめに 232

二 「同人雑誌」と大正時代 233

巖安生 232

三 『女神』詩人がデビューするまで 236

四 「場」、「磁場」、「副作用」等 239

五 「海」 242

六 「図書館」 247

あとがき

川本皓嗣 254

昨春刊行してご好評を得た『一九二〇年代東アジアの文化交流』に引き続き、大手前大学比較文化研究叢書第七巻『一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ』を、ようやく出版する運びとなった。例年よりも発行が数ヶ月遅くなったことを、ことに執筆者各位にお詫びしたい。前巻と同様、本書でも寄稿者の国籍は、日本をはじめ、韓国、中国、アメリカと多岐にわたるため、英語原稿からの翻訳や執筆者校正などの作業に、思わぬ手間がかかってしまった。

本書の内容は、二〇一〇年十一月、大手前大学交流文化研究所が主催した同名の国際シンポジウムでの発表原稿をもとに、大幅な加筆修正を施したものである。またこのシンポジウムは、交流文化研究所の上垣外憲一教授の企画にもとづき、氏と私が協議を重ねて構想を練った、いわゆるクローズド・ワークショップである。はるばる北京、ソウル、東京、そして米国ケンブリッジから駆けつけ、貴重な発表と議論をたまわった諸氏に、心からお礼を申し上げる。そして前回以来、ご近所の芦屋からご参加いただいたいる最長老の竹村民郎教授にも、敬意を表したい。

一九二〇年代——日本では大正から昭和の初めにかけての時期は、世界的に見ても、たえず戦争や紛争に明け暮れた二〇世紀のなかで、ごく短期間ながら、民族や国境の壁を越えた相互刺激と、異種混濬的な創造力が豊かな実を結んだ、まれに見る「文化の時代」だった。中国、韓国、日本など東アジアでも、数々の注目すべき活

動が繰り広げられていた。だが残念ながら、その後の圧倒的な国際政治情勢の険悪化のために、それらつかの間の「交流文化」の花は、たちまち踏みにじられ、その後もほとんど陽の目を浴びることがなかった。ことに東アジアでは、個々の作家・芸術家についての研究はそれなりにあるものの、一九二〇年代の文化を総合的に捉えるという試みは、まだ十分に行われているとは言いがたい。

昨年の成果をさらに深めようという意図のもとに編まれた本書が、「一九二〇年代東アジアの文化交流」研究に新たな一石を投じることができれば、まことに幸いである。

末筆ながら、発行担当の思文閣出版の諸氏は、事務所移転という匆忙の間にもかかわらず、円滑に編集作業を進めてくださった。ここにあらためて感謝の意を表したい。

大手前大学学長・交流文化研究所所長

川本 皓嗣

## 執筆一覧（執筆順）

上垣外憲一（かみがいと・けんいち）

1948年5月3日生。東京大学大学院人文科学比較文学比較文化課程修了。学術博士（比較文学・比較文化）。現在、大手前大学総合文化学部教授。著書に、『空海と霊海めぐり伝説』（角川書店、2004）、『雨森芳洲』（講談社、2005）、『富士山』（中央公論新社、2009）など。大手前大学比較文化研究叢書6の編者。

Karen L. Thornber（カレン・ローラ・ソーンバー）

ハーバード大学修了。博士（東洋言語・文化）。現在、ハーバード大学准教授。著書に、『*Ecoambiguity: Environmental Crises and East Asian Literatures*（University of Michigan Press, 2011）、『*Empire of Texts in Motion: Chinese, Korean, and Taiwanese Transculturations of Japanese Literature*（Harvard University Press, 2009、同書で2010年度Anna Balakian Memorial Prizeを受賞）など。

竹村 民郎（たけむら・たみお）

1929年2月17日生。立命館大学卒業（経済史）。現在、国際日本文化研究センター共同研究員、大阪産業大学名誉教授。著書に、『独占と兵器生産——リベラリズムの経済構造——』（勁草書房、1971）、『娼娼運動——廓の女性はどう解放されたか——』（中央公論社、1982）、『増補 大正文化帝国のユートピア——世界史の転換期と大衆消費社会の形成——』（三元社、2010）など。

程 朝翔（てい・ちようしょう）

1959年8月22日生。北京大学修了。文学博士。現在、北京大学外国語学院教授。論文に、「戦争对于莎士比亚的利用：一个文学为社会所用的个案」（『外国文学研究』、2005-4）、「莎士比亚的文本、电影与现代战争」（『国外文学』2005-5）、「莎士比亚的《李尔王》：一出当代悲剧」（『新编外国文学史：外国文学名著批评经典』梁坤主編、人民大学出版社、2009）など。

周 関（しゅう・えつ）

1967年10月1日生。北京大学修了。文学博士（比較文学）。現在、北京語言大学人文学院教授。著書に、『よしもとばなの文学世界』（宁夏人民出版社、2005）、『川端康成文学の文化学研究』（北京大学出版社、2008）、論文に、「嚴紹鏗先生の東亜文学关系と日本中国学研究」（『漢学研究』第12集、2010-4）など。

劉 岸偉（りゅう・がんい）

1957年4月3日生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（比較文学・比較文化）。現在、東京工業大学外国語研究教育センター教授。著書に、『東洋人の悲哀——周作人と日本——』（河出書房新社、1991）、『明末の文人李卓吾』（中央公論社、1994）、『小泉八雲と近代中国』（岩波書店、2004）など。

梁 東国（ヤン・ドングク）

1963年4月26日生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。学術博士（比較文学・比較文化）。現在、祥明大学校日本語文学科教授。共著に、『比較文学者から見た日本・日本人』（現代文学、2005）、最近の論文に、「茨木のり子と韓国——知性と叙情を超えて——」（『日本語教育』第49輯、2009）、「ある逆翻訳（Inverse Translation）の詩文学的波動」（『日本研究』第30輯、2011）など。

趙 怡（ちょう・い）

1962年生。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学（比較文学・比較文化）。現在、東京工業大学非常勤講師。論文に、『「悪魔詩人」と『漂泊詩人』——田漢の象徴詩人像と日本文壇の影響』（東大比較文学会『比較文学研究』73号、1999-2）、「一九二〇年代の上海における日中文化人の交流——金子光晴・森三千代の場合を中心に——」（『大手前大学比較文化研究叢書6 一九二〇年代東アジアの文化交流』、思文閣出版、2010）、「『同化』か『異化』か——中・日・英（仏）詩の相互翻訳と漢詩訓読」（東大比較文学会『比較文学研究』96号、2011-6）など。

岩谷 幹子（いわや・みきこ）

東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学（比較文学・比較文化）。論文に、『「記憶の場」としての『吉野葛』』（『大手前大学比較文化研究叢書5 阪神文化論』、思文閣出版、2008）、「繁茂的叙事：中上健次文体和谷崎潤一郎、紫式部、威廉・福克納の文体比較研究」（原題「繁茂する語り——中上健次の文体と谷崎潤一郎、紫式部、William Faulknerの文体との比較研究——」『東亜詩学与文化互読——川本皓嗣古稀記念論文集』、中華書局、2009-10）など。

巖 安生（げん・あんせい）

1937年11月28日生。東京大学大学院博士課程修了。学術博士（比較文学・比較文化）。現在、北京外国語大学教授。著書に、『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡——』（岩波書店、1991、同著で第19回大佛次郎賞と第4回アジア・太平洋賞大賞を受賞）、『日本人の自己認識・近代日本文化論2』（青木保ほか共著、岩波書店、1999）、『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学精神史——』（岩波書店、2008）など。

川本 皓嗣（かわもと・こうじ）

1939年10月28日生。東京大学大学院博士課程中退。学術博士（比較文学・比較文化）。現在、大手前大学学長、日本学士院会員、東京大学名誉教授。著書に、『日本詩歌の伝統 七と五の詩学』（岩波書店、1991）、『アメリカ名詩選』（共著、岩波文庫、1993）、『文学の方法』（共編、東京大学出版会、1996）、『翻訳の方法』（共編、東京大学出版会、1997）、『岩波セミナーブックス75 アメリカの詩を読む』（岩波書店、1998）、『川本皓嗣中国講演録』（北京大学出版社、2010）、最近の論文に、「日本詩歌中の伝統と近代」（蔣春紅訳、『東亜詩学与文化互読 川本皓嗣古稀記念論文集』、中華書局、2009）、「切字の詩学」（『俳句教養講座二 俳句の詩学・美学』、角川学芸出版、2009）など。大手前大学比較文化研究叢書3・5・6の編者。

大手前大学比較文化研究叢書 7

一九二〇年代東<sup>ねんだいひがし</sup>アジアの文化交<sup>ぶんかこうりゅう</sup>流 II

2011年6月30日 発行

定価：本体2,500円（税別）

編 者 川 本 皓 嗣

上垣外 憲 一

発行者 田 中 周 二

発行所 株式会社 思文閣出版

京都市東山区元町 355

電話 075-751-1781（代表）

印 刷  
製 本

亜細亜印刷株式会社

© Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1584-3